

カナダ・イヌイトとの体験

- 人類学の応用 -

岸上伸啓（国立民族学博物館）

（＊）平成 15 年度 国立民族学博物館公開講演会「国際協力の現場から 人類学者の私的実践」（日本経済新聞社ホール）において 2003 年 12 月 19 日に講演したものです。この講演会は国立民族学博物館と日本経済新聞との共催です。

1 はじめに

ただいまご紹介にあずかりました民博の岸上伸啓です。本日は、開発援助の問題を私自身のカナダ・イヌイトとの体験をもとに話したいと思います。

経済や文化のグローバル化が進むなかで、現代社会は大きく変貌をとげつつあります。かつての人類学が研究対象として想定してきたような地理的に孤立し、社会的に閉鎖した小規模な社会は北の果てであっても、アフリカの奥地であってももはや存在していないといえます。このような歴史的な脈絡の中で、研究対象や問題意識において人類学自体も大きな変貌を遂げてきました。

文化人類学とは、（異）文化を理解し、記述・分析する学問です。現代の文化人類学には現地調査を積み重ね、問題を発見し、記述・分析することをおもな目的とする基礎研究と現代社会が直面する現実的な諸問題を解決するために人類学的な知見を利用する応用研究の 2 つの流れに大別できます。ここでは文化人類学のことを人類学と略称させていただきます。

日本の人類学の大半は基礎研究であり、一部の例外を除けば、人類学的な知識や知見が、現実社会の問題解決に援用されることはありませんでした。むしろ学問は中立であるべきであり、学問のための学問はすばらしいものとされ、学問の社会への応用や関与は望ましくないとする風潮が主流でありました。しかし、世界各地の少数民族や先住民族が政治経済的な困難に直面している現状を目の当たりにした人類学者の間には、研究者が現実社会に関与することは必要であるとの認識が広まりはじめました。特にアメリカを中心に問題解決のために人類学的な調査や知見を利用する「応用人類学」がさかんになってきています。

応用人類学には、教育の問題を取り扱う「教育人類学」、社会経済問題の解決をめざす「開発人類学」、開発現象やそれをめぐる言説を研究する「開発の人類学」、現地の医療や西洋医療を研究対象とする「医療人類学」など多様な人類学が存在します。この中で、「開発人類学」は、おもに第 3 世界（発展途上国）の社会経済発展を円滑に援助するためには、どのようにすればよいかという問題を研究テーマの中心にすえてきました。

しかし、ここで注意しておきたいことは、何も発展途上国である第 3 世界だけでなく、発展国の貧民層や第 1 世界の中に住むマイノリティー・グループや先住民社会の人々も「開発」を望んでいるという点であります。なお、第 1 世界の国家の中に取り込まれて生活を営んで

いる先住民社会は第4世界と呼ばれています。

本日、私がこれからお話をするのは、第3世界の開発援助ではなく、第4世界の開発援助についてです。

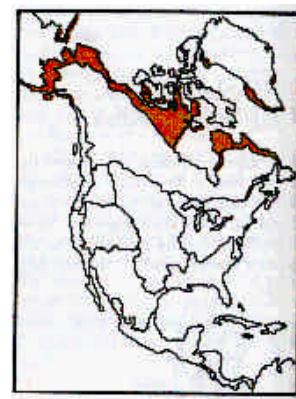
私は1984年からカナダの極北地域に住むイヌイットの人たちの社会と文化についての調査をはじめました。当初の私自身の関心は、イヌイットの「伝統的な社会構造」を復元し、分析することでした。しかし、私がはじめて訪れたイヌイットの村では人々は電気があるプレハブの家に住み、ジーンズをはいて生活をし、さらに日本製のスノーモービルやテレビ、ラジオを利用していました。アクリヴィクという人口300人あまりのイヌイットの村で住み込み調査をしているうちに、私の関心は過去の社会から現代の社会へと移っていきました。そして現代のイヌイットがいろいろな問題に直面し、苦悩し、問題解決を求めている姿をみるうちに、自分の研究が彼らの問題解決に役立たせることはできないだろうかと考えはじめました。

イヌイットとばれている人々は、カナダやグリーンランドに住んでいます。かつてはエスキモーと呼ばれていましたが、北アメリカ北東部のインディアンの言葉であるオジブワ語やクリー語では「生肉を食べるやから」を意味し、かつ自称ではなくほかの人々が彼らを呼んでいる他称です。1970年代にカナダでは先住民運動が活発に展開された結果、カナダ政府やマスコミは差別的な名称であると考えられるエスキモーではなく、イヌイットという名称を公式に使用するようになりました。蛇足ですが、アラスカやロシアでは、自らを他の先住民と区別するために「エスキモー」という名称が自称として使用されています。また、ある言語学者は「エスキモー」とは雪の上を歩くための補助具である「かんじき」を意味していると指摘しています。このため、「エスキモー」という名称は必ずしも差別的な名称であるとはいえません。また、アラスカではイヌイットという名称は使用されず、ユピックやイヌピアックという自称が使用されています。したがって、イヌイットという名称をアラスカの極北民に適用することは誤りであるといえます。このため、現在でもシベリアからグリーンランドまでの極北先住民の総称として「エスキモー」という名称を使用することがあります。ちなみに言語学者はエスキモー語、考古学者はエスキモー文化という名称を現在でも専門用語として使用しています。

人類が極北地域に進出したのは、いまから4000年ほど前のことです。

この地図は、イヌイットの分布を示しています。

イヌイットの分布域は、高木が生育しない森林限界以北にほぼ一致しています。イヌイットはロシアのチュコトカ半島の沿岸部からアラスカ、カナダ、そしてグリーンランドの沿岸部にかけて分布しています。現在、総数は13万から15万人であるといわれています。そのうちの4万5千人あまりがカナダに住んでいます。



では、極北地域はどのような環境でしょうか。



このスライドは極北の冬の風景です。見渡す限り氷原です。沿岸地域は氷によって覆われます。冬は日照時間が短く、長夜になります。さらに寒いときにはマイナス 30 度以下になります。



次は夏の風景です。夏は日照時間がながいのですが、期間が短く、涼しいです。もっとも暖かい月である 7 月の平均気温は 10 度以下です。



次のスライドは、秋の内陸部の様子です。永久凍土であるため地表から数百メートルまでカッチンチンに凍りついています。夏には表面の数センチが解けます。

このようにイヌイットは、高木が生えない、寒冷ツンドラ気候のもとで、アザラシ、セイウチ、ホッキョクイワナ、シロイルカなど海洋資源をおもに利用しながら環境に適応してきました。

2 カナダ・イヌイット社会の変貌

イヌイットが外部の社会と頻繁に接触をするようになったのは、カナダの極北各地でホッキョクキツネの毛皮の取引に従事するようになった1920年代以降のことです。この取引によってイヌイットは鉄製のナイフや罫具、針、ヤカンなど金属製品、ライフル、布地、小麦粉、紅茶を入手するようになりました。また、1930年代にはいと多くのイヌイットが宣教師の布教活動によってキリスト教へと改宗した。

ところが、1930年代には欧米人との接触によって結核など伝染病が極北の各地で蔓延し、多数のイヌイットの命を奪い、人口が激減しました。カナダ政府はその惨状を放置できず、医療援助や経済援助を開始しました。第2次世界大戦が終結すると、ソ連に対する軍事戦略的な観点から極北地域が重視されるようになり、グリーンランドからアラスカにかけてレーダー基地が建設されました。このころから極北の狩猟民イヌイットは外の社会とより頻繁に接触をするようになりました。

1950年代の後半からカナダ政府は、イヌイットを村に定住させ、英語による初等教育を実施し、さらに家族扶養手当の支給など福祉サービスを提供し、国民化政策を実施しました。この先住民政策の目的は、イヌイットに英語を習得させ、かつキリスト教的な価値観をもつカナダ国民にすることでした。この同化政策は、15年近く続きました。

ところが1973年にカナダの最高裁が先住民の権原（ネイティブ・タイトル）が消滅していないことを表明してから、カナダ政府は先住民政策の方針を大転換させ、これまで条約を

結んでいない先住民のグループや、結んでいても条約を履行しなかった先住民のグループと諸権益について話し合いを開始しました。先住民の諸権益とは、先住民が本来もっているはずの狩猟や漁労をする権利、特定の土地を利用したり、所有したりする権利のことです。

1975年にケベック州極北部に住むイヌイットが「ジェームズ湾および北ケベック協定」を、1984年には西部極北地域に住む先住民が「イヌヴィアルイット協定」を、1993年には中部および東部極北地域の人々が「ヌナフト協定」を、1999年にはラブラドールのイヌイットが「ラブラドール協定」を、カナダ政府や州政府を相手に締結しました。これによってカナダ・イヌイットの大半が政治的な自律性を回復するとともに、生業権や土地権、補償金を獲得するに至ったのです。

3 カナダ・イヌイット社会の現状と問題点

イヌイットは極北の狩猟民であるというイメージが日本人社会では広まっていますが、2003年の時点におけるイヌイット社会はもはや狩猟採集民社会ではありません。現代のイヌイットの多くは、村の中で定職をもち、ウィークデーには午前9時から午後5時まで狩猟・漁労以外の仕事をしています。狩猟・漁労のみに従事している男性は、成人男性全体の30%かそれ以下であるといえます。また、村を出てカナダ南部にある都市で生活をしている人もいます。



このスライドは昔のイヌイットのハンターの姿です。イヌイットの村イヌクジュアクの博物館に展示されているものです。



現在でも真冬に狩にでるイヌイットのハンターは、カリブーの毛皮で作った上着とズボン、手袋、アザラシ皮で作った靴を利用していますが、日常的な衣類ではありません。



次のスライドは、1980年代のハンターの姿です。日本製の船外機がついたカヌーにのってアザラシ猟を行っています。



次のスライドは、地元ではスキデューと言いますが、スノーモービルを用いて湖に行き、湖氷上で化繊製の漁網を利用して魚を取っている様子です。



次のスライドは現在のイヌイットの村の様子です。雪の家やアザラシ皮のテントではなくプレハブの家に住んでいます。政府が提供したもので、暖房つき、水洗便所やシャワーがついています。イヌイットは住宅会社に対し、1ヶ月カナダ・ドルで200ドルから500ドル程度、すなわち日本円に換算すると1万8千円から4万5千円程度の家賃を支払っています。



次のスライドは7月1日のカナダの日（国を祝う日）の様子です。イヌイットはカナダ国民であることを誇りに思っています。彼らにとってイヌイットであることとカナダ国民であることは矛盾することではありません。



次のスライドは、イヌイットの小学校でのコンピューターを利用した授業の様子です。イヌイットの子供たちは、英語やイヌイット語で作文をしたり、インターネットを利用して情報検索をおこなっています。

現在のイヌイット社会は、政治的な自律性をまし、先住民として生きる諸権利を獲得してきました。その一方で、高い失業率、頻繁に起こる青少年の自殺、暴行事件、麻薬・アルコール問題など深刻な社会・経済問題に直面しています。さらに、深刻化する環境汚染の問題もイヌイットにとって大きな脅威となっています。

4 開発援助をめぐる私的体験

4.1 調査遍歴

私は 1983 年にカナダのモントリオールにあるマクギル大学の人類学科に留学したことをきっかけとして、同年より本格的にイヌイット研究を開始しました。1984 年にはじめて極北の地を訪れてから 20 年近くがたちます。

当初は、イヌイットの「伝統的な」社会生活や社会構造を研究することを志していましたが、北海道教育大学から民博に転任した 1996 年ころから、イヌイットの現代の経済活動に関する調査や都市に移住したイヌイットの生活を研究するようになりました。この研究は、実態の把握から出発しましたが、その成果に、イヌイットの人々自身が関心を持ち、彼らの将来を構想する上で参考にしはじめました。

今回は、私自身が深く関与した 2 つの開発に関する事例を紹介します。

4.2 ハンター・サポート・プログラムの研究と実施による影響のアセスメント

ケベック州極北部ヌナヴィクに住むイヌイットは、1975 年に「ジェームズ湾および北ケベック協定」を締結しました。その中で彼らは狩猟・漁労の維持・促進に固執しました。そしてケベック州政府と協議のすえ、「ハンター・サポート・プログラム」の制度を作り上げました。ハンター・サポート・プログラムとは、日本語に訳せば、狩猟者支援制度とでもいえるでしょうか。

ハンター・サポート・プログラムとは、各村に地元でとれるアザラシ、セイウチ、カリブーやホッキョクイワナなどの食料を提供できるように、そしてまた狩猟・漁労活動を続けることができるように、毎年ケベック州政府がイヌイットに資金を提供する制度です。まず、ヌナヴィク地域全体の行政を担当しているカティヴィク地方政府に補助金が給付されます。カティヴィク地方政府は、村の人口などを考慮して各村に資金を配分します。この資金の運用は、大枠の中で村の裁量に任されています。

ヌナヴィクには 14 の村があります。最大の村はクージュアックで約 2200 人の人口です。最小の村はアウパルクで約 160 人です。私の調査地であるアクリヴィクの人口は約 450 人です。2001 年のハンター・サポート・プログラムの総額はカナダ・ドルで 466 万ドルです。日本円に換算すると約 4 億 2 千万円です。ちなみにクージュアックの年間予算は、47 万ドル、日本円で約 4230 万円、アクリヴィク村で 19 万ドル、日本円で約 1700 万円です。ほぼ同額が 1984 年ころから毎年、ケベック政府から支給されています。

アクリヴィク村では、村用の大型ボートを購入し、それを利用した遠隔地でのセイウチ猟やシロイルカ猟、彫刻に利用するソープストーンの採掘を実施し、獲物や滑石を必要とする村人に無償で提供しています。さらに、厳冬期には地元のハンターから魚やカリブーの肉をその資金で買い上げ、村の古老や食料を必要とする世帯に無償で提供しています。

スライドを用いて、ハンター・サポート・プログラムを利用したシロイルカ猟とその肉の分配について紹介します。



スライドには捕獲されたシロイルカが出ています。シロイルカは、小型のクジラです。体長が3メートルから5メートルで、体重は最大で800キロ程度です。イヌイットは、マツタックと呼ばれる脂肪のついた白い皮の部分をおの好物としています。味は無味に近く、噛んでも噛んでも噛み切ることができません。私に言わせるとまるでブリジストン・タイヤを噛んでいるようなものですが、子供から歯の抜けた老人まで喜んで食べます。



次のスライドは、ハンターたちがケープ・スミス島の丘に登り、回遊しているシロイルカを探しているところです。寒い中を一日中まわってもシロイルカを1頭も発見できなきことが多々あります。



シロイルカを発見すると、2人一組で船外機をついたカヌーに乗り、追跡を始めます。シロイルカは、危険を察知すると陸側に逃げる習性をもっています。ハンターたちは、シロイルカを陸側に追い込み、至近距離からライフルを撃ち、それから鉾を打ち込みます。

仕留めると、近くの岸で解体し、適当な大きさに肉や皮の部分を切り分けます。それは、まず、狩猟に参加したハンターの間で分配された後に、村に持ち帰ります。村に持ち帰られた皮部や肉は、村にいる家族、親族、友人へと分配されます。

このような分配は、日常的に行われていますが、シロイルカやセイウチの狩猟場は、村から100キロ以上はなれています。アクリヴィク村では、シロイルカやセイウチの狩猟にハンター・サポート・プログラムを利用しています。



このスライドは、ハンター・サポート・プログラムを利用してアクリヴィク村が購入し、利用している大型ボートです。アクリヴィク村では、ハンター・サポート・プログラムを利用して1985年ころから毎年10月に村がハンターを雇い、村所有の大型ボートを利用して村全体のためにシロイルカをとり、村の全世帯に平等に分配するようにしています。同様に9月にはセイウチ猟をハンター・サポート・プログラムを利用して実施しています。



次のスライドは、村に持ち帰られたシロイルカの皮部を、村の古老と村の役人が世帯の数に平等に分配している様子です。一世帯あたり 30 キロ以上のシロイルカの皮の部分を手に入れます。



次のスライドは、私の下宿先がもってきたシロイルカの皮の部分です。私の下宿先の世帯では、シロイルカの皮部や肉のほかに、シロイルカの頭部ももってきました。

私は、このハンター・サポート・プログラムの制度がどのような効果を村人に及ぼしているかを5年以上にわたって調査してきました。その結果、この制度の利用と実施が、中高年のハンターに現金を提供していることや、ハンターがいない老人の世帯や寡婦の世帯に肉や魚が提供されていることなど経済的な効果がみられました。また、村で仕事をしているために十分に狩猟や漁労に従事できない人たちの世帯にも肉や魚が提供されています。村全体での資源の捕獲や分配の実践は経済的な効果があるだけでなく、村人意識やイヌイト意識の高揚や維持を生み出しているといえます。私は、この制度の持続的利用を推奨するととも

に、多くのハンターや若者が参加できるよう改良点を指摘しました。特に、古老がもつ人生の知恵や生態的な知識、狩猟技術、道具や衣類の制作の技術の伝承をこのプログラムを活用して若い世代に伝えることを提案しました。

4.3 モントリオール・イヌイット協会の創設と運営への協力

次にモントリオール・イヌイット協会の設立に協力したことをお話しします。

イヌイットが定住生活をはじめた 1960 年代以降、イヌイットの人口は増加の一途をたっています。その一方で、極北地域を離れて、オタワやモントリオール、エドモントンに移り住むイヌイットの数も増加しはじめました。すでにファースト・ネーションズと呼ばれるインディアンの人々の場合には、政府が指定するリザーブ（居留地）を離れ、都市に移住した人口が半数を超えています。一方、極北のツンドラ地帯にあるイヌイットの村は、もっとも南に位置するものでも都市と 1000 キロメートル以上離れており、その間には道路も鉄道もなく、飛行機以外では移動することはできません。しかしながら 2001 年の国勢調査によれば、イヌイットの総人口 45000 人のうち 5 千から 6 千人（10%から 15%）がカナダ南部の都市に住んでいることが判明しました。国勢調査によるとモントリオールには、1991 年に 325 人、1996 年に 365 人、2001 年に 435 人がいると報告されています。しかし、実際にはこの 2 倍近くのイヌイットがいると推定されます。そしてその人口は着実に増加しています。

民博では 1996 年から 1997 年の 2 カ年にわたり松山利夫教授が「都市の先住民」研究プロジェクトの科研調査と民博共同研究会を実施しました。私は研究分担者としてカナダの先住民を担当し、1996 年と 1997 年の夏にモントリオールにおいて都市在住のイヌイットを対象としたインタビュー調査を実施しました。

モントリオールには、仕事をしている人、無職の人、学生、病人、ホームレスの人などさまざまなイヌイットの人々が住んでいます。彼らは、仕事や学校のためにモントリオールに移動した人、総合病院で治療や手術をうけるためにモントリオールに来た人、ヨーロッパ系カナダ人の配偶者について南に来た人、村から逃げ出してきた人、村から追い出された人、村で犯罪を犯し南の刑務所で刑期を終えた後にそのままモントリオールに残った人などがいます。貧富の差も極北の村以上に見られます。

モントリオールでは、アザラシやカリブーの肉などの食材が手に入らず伝統的なイヌイットの食生活を維持できないこと、学歴や言葉の問題があり就職が難しいこと、イヌイットの人たちは、集住地区を形成せず、モントリオール地区に分散してすんでいるため社会的な孤立がみられること、イヌイット語を使うことができないなど、イヌイットの人々はさまざまな問題を抱えています。

私は調査の結果を英文の報告書にまとめ、イヌイットの政治団体や政府関連機関に配布しました。それを読んだモントリオール在住の数名のイヌイットたちが、現状にたいして危機感を持ち、都市イヌイットの親ぼく・相互扶助団体をつくろうと話しました。さらに私が報告書で示した提案を参考にして、イヌイット料理を月に 1 度、都市在住のイヌイットに

ふるまうという食事会をボランティア活動として、英国国教会やマキヴィク・コーポレーション（ヌナヴィク・イヌイットの政治経済団体）、エアー・イヌイット、ファースト・エアー、ヌナヴィク地域の14村の協力を得て、はじめました。さらにドロップ・イン・センターとアート・食料・衣類の店舗をモントリオールの郊外で開設しました。残念ながらボランティア不足のため、ドロップ・イン・センターは一月に数度しか開設されていません。しかしながら、モントリオール在住のイヌイットの人たちは自らの意思と努力で、新しいコミュニティを作ろうと努力しています。

現在でもモントリオールにおいて私は調査を続ける一方で、できる限りボランティアとして食事会の準備、ドロップ・イン・センターの受付などの仕事を手伝っています。ここでスライドをお見せいたします。

（*肖像権を考慮してスライドはウェブ・サイトで公開せず）このスライドは、モントリオールの地下鉄の入り口で、撮ったイヌイットの人たちです。2人は無職、1人は学生、もう一人はホームレスの女性です。北米の都市では、教会やシェルターなどの慈善団体が衣類、食べ物、時には寝る場所を提供するため、ホームレスの人でも生きていけます。この女性はモントリオールにおいて20年近く、ホームレスの生活を送っています。



このスライドは、通称レッド・ルーフ(赤い屋根)と呼ばれているモントリオール市内にある英国国教会の教会です。ここでは、貧しい人を対象に、月曜日から金曜日まで毎日、昼食を振舞っています。無職やホームレスのイヌイットの人たちは、このようなところで食事を取っています。



モントリオールの郊外ドヴァール市に開設されたモントリオール・イヌイト協会のドロップ・イン・センターとショップです。これらの建物は、北ケベック・イヌイトの政治経済団体であるマキヴィク・コーポレーションが無償で提供しています。窓ガラスには、イヌイト語とフランス語で「モントリオールのイヌイトの協会」と書かれています。



このスライドは、モントリオール・イヌイト協会のショップの中の様子です。ここでは彫刻や版画などイヌイトのアート作品、衣類、食料品が販売されています。現時点では、このショップの経営は、赤字です。当面、ヌナヴィク・イヌイトの政治・経済団体であるマキヴィク・コーポレーションが金銭的に援助をしていますが、将来的にはショップの利益でドロップ・イン・センターを運営する予定です。



このスライドは、ドロップ・イン・センターの中の様子です。月に1,2度、衣服作りの学習会が定期的に行われています。また、極北からの訪問者が来ると、お茶を飲んだり、テレビやビデオを見たりすることができます。台所があり、調理をすることもできます。



このスライドは、極北地域の村から月例の夕食会のために寄付されてきた冷凍のホッキョクイワナがつまった箱です。ボランティアの人たちは、月例の夕食会が近づくと14の村役場に電話をかけ、寄付をお願いしています。多くの村がエア・イヌイトとファースト・エアのカーゴを利用して肉や魚を送ってくれます。この送料は、航空会社の協力で無料です。一方、モントリオール・イヌイト協会は、食べ物を送ってくれたお返しに、年に2度ほど、使わなくなった衣類や本、ホッケーの道具、中古の家具や電気製品を北の村々に送っています。

(*肖像権を考慮してウェブ・サイトでは公開せず) このスライドは、月例会の食事の準備をするボランティアのイヌイトの女性です。食事会は、毎月最後の土曜日の夕方にラシーヌ市のセント・ポール教会の集会場を借りて行われます。食事会には平均して140名以上のイヌイトが参加しますが、クリスマスやイースターの時には300名を越すことが

あります。ヨーロッパ系カナダ人のボランティアの人も参加しています。

(*肖像権を考慮してウェブ・サイトでは公開せず) 夕食会の後に、子供のゲーム大会が開催されています。子供たちの交流が行われています。



極北の村からモントリオール在住の親戚にカリブーの冷凍肉や冷凍のホッキョクイワナが、モントリオールに行く人に託されて送られることがあります。このスライドは今年の10月に調査を終え、モントリオールに移動する時に、イヌイットの友人からモントリオールに住む親戚に渡してくれるようにと託されたカリブーの肉の入った箱です。友人はモントリオールの親戚に電話をかけ、私がモントリオールのドヴァール空港に何時に到着するかを知らせます。知らせを受けた友人の親戚かほかのイヌイットが空港の到着出口で待っており、その箱を受け取ります。このようにモントリオールに住んでいても、出身村との関係は電話や食料をおくることなどによって保たれています。

都市在住のイヌイットの人たちは、このように極北とは異なる社会自然環境の中で生き抜くための努力を行っています。そしてボランティアによる月例の夕食会の実施を通して、モントリオール在住のイヌイットの間で交流が活発になり、コミュニティが形成されつつあります。イヌイット自身の努力で、都市生活の質を向上させてきたといえますが、それに私自身が1役かうことができたことは、これまで調査をさせてもらってきたイヌイットの方に少しは恩返しができるのではないかと考えています。

5 人類学(者)に何ができるか? : 妥当性の追求

では、人類学者に何ができるのでしょうか。

私たちは、お金はありませんが、イヌイットの人たちの生活の質を向上させるために、個人のレベルで時間と労力、知識を提供することができます。その事例としてハンター・サポート・プログラムのアセスメント調査とモントリオール・イヌイット協会の設立という2つの事例を紹介しました。

私が協力したこれらの事例で特徴的なことは、私は相談役もしくは彼らの活動に協力するボランティアのような存在であり、イヌイット自身がイニシアティブをとり、行動をとっている点です。

開発に関する国際協力とは、物資や資金の押しつけではなく、当事者の人たちが計画や運営、評価に積極的に参加してこそ、成功するといえます。本年度、日本は ODA すなわち政府の途上国援助として約 8580 億円を支出しています。開発援助には、国家によるもの、NGO など市民団体によるもの、個人のボランティアによるものなど、いろいろな種類がありますが、無駄なお金を大量に提供するよりは、現実に即した小さな協力の方がより効果的であることがあります。

現地でフィールドワークを実施する人類学者は、現地の人々と生活を共有する者としての現地社会の視点（もしくは現地からのまなざし）、そして異文化出身の研究者としての外部の視点（外からのまなざし）、さらに比較の視点をもった存在です。人類学者の強みは、現地の状況と現地の人々が何を必要としているかを、長期にわたる現地での実体験や現地の人々との付き合いを通して知っていることです。開発援助に複数の利害関係者が存在している以上、援助協力の計画、実施、評価には複数の利害が複雑に関与し、反映されることとなります。政治的・経済的な権力者側の意向にのみかたよるのではなく、地元民にとっての「妥当な」援助協力を考え、実施する上で、人類学者はほかの社会学者や自然科学者、行政官、地元民とともに重要な役割を果たすことができるといえます。地元における「妥当性」は、文化、地域、時代によって異なります。少なくとも人類学者は、開発援助を具体的に立案し、実施するうえで、地元社会と異なる価値観をもつ外部社会との情報交換や交渉の仲介者の役を果たすことができると思います。

開発援助の中でもう 1 点、強調しておきたいことがあります。開発援助が一方向的、一方向的な資金や技術の提供で終わるのではなく、開発援助をより実のあるものにするためには、援助実施後の経過や諸影響を査定することが必要であるという点です。地元の視点から開発援助の実施がどのような効果があったのか、問題点や改善すべき点を調査し、その結果をもとに開発援助のやり方を見直すことが必要だと思います。この開発援助の経過や諸影響の査定にも人類学者は貢献できると思います。

日本政府の国際開発援助政策や JICA などの援助機関では、一部の例外を除けば文化人類学的な知識や知見はあまり活用されていません。日本の開発援助の基本は、条件をつけない資金の提供やダム作りや橋作りなどインフラの整備が中心です。文化的な視点よりも、工学的な視点が重視されてきたといえます。日本が世界の開発援助の中で重要な役割を果たすためにも、莫大な金銭や無用な建造物を外国に単に提供するのではなく、開発援助の立案、実施、査定において文化人類学的な知見や文化人類学者をおおいに活用し、より実のある国際開発援助を行っていただきたいものだと思います。

ご静聴ありがとうございました。